

「逆流性食道炎」という病気を知っていますか？

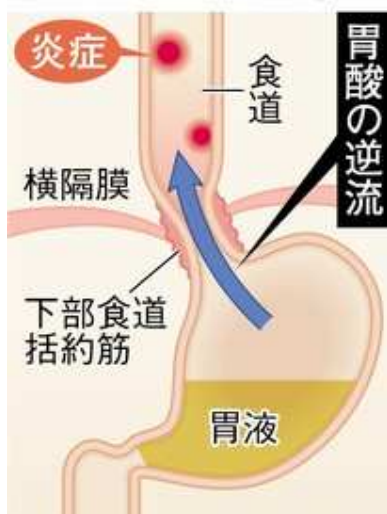
～津山市医師会～

少し前にテレビで鉄腕アトムが登場して「胃の痛みとっていたのが実は食道の痛みなんです」と言ってアトムが胸を開くCMをご覧になられた方は多くおられると思います。

これは逆流性食道炎と言って、胃液が食道へ逆流することで、人により様々な症状が引き起こされます。一番典型的な症状は胸やけ症状で、胸からみぞおちにかけて焼け付くような症状が出てきます。ただ単に痛みだけが強く出てきて、心筋梗塞と間違えることもあります。また痛みはあまりひどくなくてもお腹の張り(腹部膨満感)や違和感を訴える患者さんも多く、またゲップをやたらすることもあります。胃液がのどまで逆流することで口の中の酸っぱさを自覚したり、原因不明ののどの違和感も生じたりします。胃酸の逆流で気管支喘息の原因にもなったり、虫歯の原因にもなります。



胃食道逆流症の仕組み



さて、この逆流性食道炎ですが、現在の状況はどうでしょうか？

当院では昨年度 10,510 件の内視鏡検査治療を行い、6,015 件の上部内視鏡検査を行っていますが、内視鏡上でこの逆流性食道炎が見られる患者数が以前に比べかなり増加しています。島根大学の足立経一先生のデータでは、全上部内視鏡施行の約 9.4%の患者で逆流性食道炎が見られるとされ、20 年前に比べおよそ 4 倍に増加しているとのことです。

食道炎の原因は何でしょうか？

以前から指摘されていますが、食生活の欧米化や飲酒、肥満、喫煙等の生活習慣の悪化やストレスが原因とされています。川崎医大消化器内科の春間教授らの研究によると、胃酸を分泌する胃壁細胞の数は内視鏡での生検検査の結果で、昭和の後半と比べ明らかに増加しており、それに伴い、以前の日本人に比べ胃酸の分泌量が増えているとのことで、食生活で肉食が増えたことが原因と考えられています。一方、肥満になると胸部と腹部を境とする横隔膜付近での下部食道括約筋が緩くなり、胃から食道へ逆流しやすくなります。また、お腹いっぱい食べてすぐ横になると食道へ逆流しやすくなり、食道炎を起こしやすくなります。実は筆者も中年太りで、この食道炎がありますが、宴会の後ですぐ横になると翌朝は何とも言えない胸焼け症状によく悩まされていました。食後すぐに横になると牛になるとの言い伝えは、この食道炎に関しては医学的に間違いではなく、腹八分目が良いのも実感されます。

最近話題のピロリ菌ですが、以前より高齢者では 8 割の健常者でピロリ菌がいることがわかり、再発する胃十二指腸潰瘍、胃癌の原因とはっきりしてきましたが、実はピロリ菌が住みついた胃粘膜は萎縮性変化を生じ、胃酸は分泌低下することがわかっています。現在の若年者ではピロリ菌の有病率が低下し、また高齢者ではピロリ菌の除菌が進み、今後さらに胃酸の分泌量が増加し欧米並みに逆流性食道炎が増加することが予想されています。

食道炎の診断、治療はどのように行うのでしょうか？

通常上部消化管の検査ではバリウム検査、内視鏡検査の 2 種類が行われますが、食道炎の診断では微細な色調変化がよくわかる内視鏡検査が重視されます。治療ではプロトンポンプ阻害薬(PPI)が有効で、自覚症状は急速に改善します。筆者の日常診療の際にも長年の胸の違和感が取れたと感謝されることがよくあり、消化器専門の医者冥利につきます。ただ気を付けなければいけないのは、このお薬はかなり強力で癌などの悪性疾患でも自覚症状を消してしまう可能性があります。胸焼け等の自覚症状のある方は、まずはかかりつけの医師にご相談し、一度胃カメラ検査をしてみてもいいでしょうか？



津山中央病院 消化器科内視鏡センター 平良明彦
お問合せ先：津山市健康増進課 0868-32-2069